

ラオスの 子ども通信



発行：(認定)特定非営利活動法人 ラオスの子ども

- 図書室からひろがる学び、2年目に向けて ▶ p.1
- はじめる・つながる・つくりだす ▶ p.2
- 「ラオスの子ども」の仲間たち ▶ p.4
- メコンのほitori「宝」 ▶ p.4



*写真の説明はp.4をご覧ください。

図書室からひろがる学び、2年目へ向けて

「図書室をつくって本を置くだけでなく、学校、地域で積極的に活用できるように」。ヴィエンチャン県教育局長代理のポオカムさんは、学びに図書室は欠かせないと力説します。県内2つの郡の8つの中等学校(中学・高校)で、学校図書室から学びをひろげる取り組みが、先生、生徒、地域の人たちによって進行中です。

ネットワークづくり、基礎研修で地盤固め

この取り組みはJICAとの連携で行われ、2023年6月、県・郡教育局とプロジェクトチームをつくり、行政=郡教育局、地域=村教育開発委員会(VEDC)、学校、当会で、それぞれの役割を記した文書を交わしてスタート。先生と地域の人々で学校図書室運営計画のワークショップを行い、図書室担当の先生にはSNS(ネット交流サービス)活用の研修を実施。Facebookページを開設して県内図書室担当のネットワークができ、先生方はスマートフォンで活用しています。

11月にはサナカム郡・ムーン郡の中等学校3校が図書室を新規開設、5校が既存図書室をリニューアルしました。併せて、先生たちに図書室のはたらきや魅力を理解してもらい、図書の管理・貸し出しの実務などの図書室基礎研修を行いました。

2024年2～4月には図書室を担当する先生と生徒たちは応用研修として、目を引くサイン(案内板)の作り方や、本を手に取りたくなる展示の仕方などを実践的に学びました。さらに各教科の先生に、授業で図書を活用する研修が行われました。



先生と生徒でサイン、展示のアイデアが膨らむ応用研修

先生のモチベーションに課題発生、助っ人登場

図書室開設・リニューアル後、当会は3か月に1度、学校を訪問して図書活動の進み具合を確認します。そんな中、ラオス事務所スタッフから「先生のモチベーションが上がらず、他の中等学校で実施した前回と比べて業務や活動の理解度も低い。手を打たないと」と声が挙がりました。1人の先生に任せてしまう学校や、研修が図書室や授業に活かされていない学校、地域の人々の参加も滞りがちな学校など。前回とは2019～2022年に同県内の中等学校で実施した図書室整備事業です(日本の外務省との連携事業)。

県・郡教育局と話し合い、担当メンバーから様々な意見が出ました。「学校ごとに図書室運営の組織図を作り、担当や役割を明確化する」「月例の校長会で各校の図書室を議題にする」「郡教育局メンバー各自の担当校を決めて改善に取り組む」などなど。県・郡教育局にとっても「自分たちが動かない」という意識に繋がったようです。そして各校のフォローアップを実施。組織図を作り役割分担を決め、業務や活動のおさらいをしました。



展示する本の選定やPOPの書き方を伝授するセン先生(左)

ここで強力な助っ人となったのが、前回の事業で活躍した同県ポンホーン郡、ヒンフープ郡の先生方です。地域との連携について紹介したサカ中等学校のダラヴォン先生、サイン・展示、POP（本のおすすめメッセージなどを書いたもの）を熱心に指導したヒンフープ中等学校のセン先生、そして忙しく図書室業務をする余裕がないという声には、自らの実践と秘訣を話したサカ中のヴォンドゥアン先生。実施校の先生は耳を傾け、質問をして課題に向き合う姿がありました。

「地域の文化を学ぶ」活動へのチャレンジ

次のステップは、「地域学習」を始めます。授業の一環で、生徒が地域の文化（伝承、祭り、料理など）を掘り起こし、それらを記録に残し、図書室で活用する、新しい取り組みです。併せて、自分たちの学校図書室を、校内の生徒や先生、地域の人々に知ってもらい利用を促す「図書室オープンデー」も開催します。

7月20日はラオスの祝日。図書室担当教員のグループSNSに、「サナカム郡ナムホーン中等学校から「この休日、図書室を一般開放してます!」とのメッセージと写真が投稿されるや、ムーン郡バンヴァン中等学校が「うちもやりますよ〜」とシェア。県教育局の職員やセン先生から、

いいね!やメッセージが。みんなで繋がりながら、2年目へと進んでいきたいです。（渡邊淳子/ラオス事務所駐在）

図書室は教育に欠かせない

インタビュー: ヴィエンチャン県教育局
ポオ カム カンタヴィヴォン局長代理



プロジェクトチーム会議で県・郡教育局のメンバーと話し合うポオカムさん

図書室は教育に必要不可欠です。学校につくって本を置くだけでなく、生徒、先生、地域の人が積極的に本を活用できるようにすることが大事です。将来、県内すべての郡にこの活動を展開していけたらと考えています。

授業で先生に教わるのと違い、図書室では知りたいことを自分で調べることができます。教科書には、ラオス国内の有名な場所や事柄などしか載ってなくても、これから始める「地域学習」では、自分たちの村の由来や、地域の特産品など、地元根差した自分ゴトの学びをすることで、より生徒たちの理解や意識が深まるでしょう。

そのためにも、出てきた問題をしっかり解決し、次のステップに進めるように、県・郡教育局と学校、地域、「ラオスの子ども」が協力し合い、チームで取り組んでいきましょう!

*ポオカムさんは2024年7月、県教育局の副局長から局長代理に就任。図書室の重要性を実感し、県内の学校全体を見据え、この活動の頼もしい存在です。

(この取り組みはJICA 草の根技術協力事業「中等学校における学校図書室の役割拡充を通じた教育改善事業」として進めています)

はじめる・つながる・つくりだす [2024.4-2024.7]

より広く活用されるラオス語教本に! 『リズムでまなぶラオス語』再版



ラオスの著名な文学者 マハー シラー ヴィラヴォンによって編集されたかつての小学校教科書に、多彩なイラストを加えて再編集した『リズムでまなぶラオス語』。このたび新たに4,500冊再版しました。

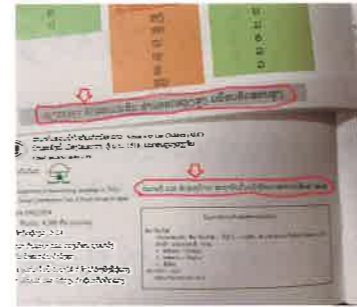
楽しくラオス語が学べる人気の本で、図書室開設の折には、子ども、先生、村の大人たちも、太鼓のリズムに合わせて、一緒になって詠唱します。多様な民族で構成されるラオスでは、少数民族の子どもたちは小学校で初めてラオス語や文字を学びます。ラオス語のしくみや発声を取り入れた詩で、和気あいあいと自然にそれが身につきます。

今回の再版では、より多くの教育現場で活用されていくことを目指し、教育スポーツ省（日本での文部科学省）の教育科学研究所（RIES）から認証登録されるように取り組みました。RIESはカリキュラムや教科書の作成などを行う機関で、認証により、教材としての信頼性が高いものとして扱われます。

そこで、旧仮名遣いと新仮名遣い（文字の古い表記と今日の表記）が分かるように注釈を入れるなどして、RIESからの指摘をクリアして完成しました。

認証によって、ラオスで教育プロジェクトを実施している国際機関やNGOに幅広く活用されて、より多くの子どもたちが楽しみながらラオス語が学べることを願っています。

(ご支援:特定非営利活動法人地球の木、リコー社会貢献クラブ・FreeWill、ラオスのこども2022年冬募金)



再版で新たに追加した注釈(上)とRIESの認証登録(下)

ラオスのこども賛助会員 拡充キャンペーン 実施中

子どもたちが本に接し、その楽しさを味わえるようにと撒いてきた種が、ようやく芽を出し、成長しはじまりました。しかし、花を咲かせ実を結ぶまでには、現地での活動の担い手をもっと育つ必要があり、まだ時間がかかります。

そして、多くの方々からの継続的な支援なしに活動を進めていくことはできません。ぜひ「ラオスのこども」の活動を会員として共に支えてください。

賛助会員の会費は、寄附金控除の対象です。

年会費:1口5,000円(複数口も可)

会員期間:ご入金月から1年

書き損じハガキ回収キャンペーン ご協力、ありがとうございます!

ご協力いただいています書き損じハガキ回収キャンペーン。410人・団体の方から、14,302枚のハガキと125万円相当の切手をいただきました。ラオスの学校で図書室を開設する費用として大切に使います。このたびは読売新聞、熊本日日新聞、京都新聞、中国新聞、山陰中央新報に掲載されたことから、新たに当会の存在と活動を知ったという多くの方からも、ハガキ、切手をご寄付いただきました。

はがき、切手とともに温かいお便りもいただきました。いくつかご紹介します。

「祖父が生前集めていたものです。お役に立てるとうれしいです」「戦前戦後に育った子どもでした。食べるものも充分になく、でも今は元気です。この切手は時代の流れによって買った物です。引き出しにあるのを思い出しました。子どもたちのために使って下さい」

「3人の子どもたちが小学生の頃、我が家に500~600冊の児童書があり、近所のお子様たちが多く集まり家庭文庫の様子でした。読み聞かせの会などをして楽しみました。本は子どもたちの笑顔をたくさん作り出してくれます」

「ラオスの子どもたちの笑顔を心に浮かべて、これからポストに向かいます」

ありがとうございます。今後ともご支援、よろしく願いいたします。

ボランティア募集中です!

お寄せいただいたはがき、切手は換金して、絵本出版や図書室開設・運営などラオスの子どもたちが図書にふれる機会を豊かにするために役立てます。東京事務所では、ハガキや切手の整理、集計、データ入力などの作業を行っています。平日昼間に事務所で作業をお手伝いいただける方を募集しています。詳しくは以下にご連絡下さい。

e-mail:alctk@deknoylao.net



はがき、切手の集計をするインターン

絵本が日本からラオスに届くまで

日本の絵本に当会で用意したラオス語訳のシートを貼って、ラオスに送る「ラオス語絵本プロジェクト」。職場で、グループで、家庭で、多くの皆さんの手で1万冊を超える絵本が作成され、ラオスの学校に届けてきました。

ここ数年、コロナ禍もあって、在宅でできるボランティア活動としても注目され、多くの方々に参加いただいています。ラオス語を貼って完成させた絵本がラオスに届いたかな?と心配している方もいらっしゃるかもしれませんが、ラオスへ輸送する船便が休止されていることから、輸送には時間がかかっていますが、確実にラオスの子どもたちのもとへ届けています。

東京事務所に届いたラオス語絵本は、主にスタッフが出張の際にラオス事務所に持っていきます(航空便を使うこともありますが、船便に比べて費用が高いため、全てを運搬できません)。

ラオス事務所では、届いた本を仕分けし、届け先の学校ごとに箱詰めをします。学校までは、視察などの際に車に積んで運んだり、路線バスでの配送を利用して、スタッフやその学校の先生が運び、ようやく学校図書室に本が届いて、本棚に並べられます。こうして、ロングジャーニーを経て、絵本は子どもたちの手元に届き、すてきなひとときが始まります。



日本から学校図書室に届いたラオス語絵本プロジェクトの絵本をみんなで囲んで

2024 活動報告会 + ピーマイイベント 開催しました

4月27日(土)、ライフコミュニティ西馬込で、「活動報告会+ ピーマイイベント」を開催しました。例年、ラオスのお正月、ピーマイパーティには多くの方に参加していただきますが、今回はいつもの会場が確保できず、活動報告会を兼ねてイベント開催としました。

第1部、活動報告会は一時帰国中の渡邊淳子駐在員が、オンラインも併用して、ラオスの中等学校の図書室開設、読書推進活動、出版などについて報告しました(その内容は本号に掲載)。

質疑応答では、子どもたちの学力についての質問に、ASEANでの統一テストでは周辺国に比べて厳しい状況で、ラオス国内でも格差が大きく、十分な学力が身につかないままに中等学校に進学している生徒が少なくないことが報告されました。また、スマホに熱中していることなど日本と同様の子どもたちの状況についても話題が及びました。あらためて図書を通じた子どもたちの成長を促す活動の大切さが共有されました。

そして第2部はピーマイイベント。小規模ながら手作りのラオス料理を用意し、楽しんでいただきました。



活動報告会

「ラオスのこども」の仲間たち

チャンタソンさんとの出会い

大村朋子さん（ジャーナリスト 元NHK記者・キャスター）

今年のピーマイイベントではラオビールを片手に、チャンタソンさんの凛とした民族衣装姿に感心しながら、30年ほど前、彼女と知り合った頃をしみじみ振り返っていました。母国の子ども達のために活動を始めたチャンタソンさんをテレビで取材させてい



大村さん(左)とチャンタソン

ただいたのが最初の出会いです。国費留学生として1974年に来日、妻として、母として、絵本を送る会代表として、大田区でまさに孤軍奮闘していた数歳年上の彼女はスラリと背が高く、聡明かつ活動的で、それまでの私の東南アジア女性のイメージとは違っていました。私はそんな彼女に憧れ、夫と共にラオスに行ってみたのです。

現地では一時帰国中のチャンタソンさんが出迎えてくれて心強かった上、古都ルアンパバンへの旅を手配してくれました。そして彼女の指示に従って早朝にホテルを出発した私たちは、初めて僧侶の托鉢を目撃したのです。オレンジ色の袈裟姿は美しく厳かで、神々しかったです。それからメコン川をのんびり遡って、パークウー洞窟の中に並ぶ夥しい数の仏像に驚きました。そして川原に出てくるとテーブルと椅子が並べられていて、私たち夫婦だけのランチが始まりました。まさにラオス。最高でした。あちこち行きましたが、ラオスほど不思議な包容力があり、癒された国は他に思いつきません。

メコンのほitori 宝

ラオスに蝶を訪ねて

2024年5月の半ば、私たちは現地の方の案内のもとにヴィエンチャンから車で3時間ほどのボリカムサイ県にあるプーカオクワイ国立公園に蝶を求めて出かけました。そして開けた川のほとりに立ち、広い川床の一隅に目を向けた瞬間、同行者から一斉に驚きの声が上がりました。そこはたくさんの蝶たちの吸水の場所だったのです。カラフルな数知れぬ蝶が次から次へと集まり、私たちがカメラをもって近づいても逃げようとしません。それはまるで夢を見ているような言葉に言い尽くせない光景でした。日本でももちろん吸水行動は見られますが、これだけの数と多種類の集団は見られません。ラオスのような蝶の宝庫の国ならでの光景でしょう。

そして私たちがこの場を立ち去りがたかったように、このような美しい自然の姿がいつまでも続くよう願いますが、他方で現在のラオスの経済開発、都市化の急速な進展が長い間保たれてきた生態系に与える影響が心配です。

生態系の保全に配慮したバランスのとれた開発等が行われ、かつてはどこでも当たり前だった自然との共生の中で営まれる生活が何らかの形で維持できれば素晴らしいですね。

会計ボランティア 福島孝好さん

表紙の写真

サナカム中等学校の図書室ボランティア。基礎研修を終え修了証書を手し、皆おすまし顔。特にサナカム中のボランティアは素晴らしく、この後の応用研修やフォローアップで先生以上に大活躍でした。図書室サイン・展示の研修では「新しいことを知ることができて、実際にやってみてとっても楽しかった」「他の学校と交流できて嬉しかった」とキラキラした目で語っていました。

特定非営利活動法人ラオスのこども

組織の理念「ラオスのこども」は、公正で平和な社会づくりに貢献することを目的として、子どもたちが自らの力を伸ばし、人生を主体的に選択できるよう、日本とラオスの人々が協働しながら、読書に親しむ環境をつくります。

ラオスのこども通信 88号

2024年8月発行 代表:チャンタソン・インタヴォン 編集人:森透

発行: Action with Lao Children / Deknoylao

(認定)特定非営利活動法人 ラオスのこども

〒143-0025東京都大田区南馬込6-29-12 ミキハイツ303

TEL/FAX 03-3755-1603 e-mail: alctk@deknoylao.net

<https://deknoylao.net>

都営地下鉄浅草線西馬込南口下車徒歩7分

郵便振替 00140-6-462494



この40年、外国人として、女性として、チャンタソンさんには様々な苦労があった事でしょう。でも今では「ラオスのこども」は国を変えたと言っても過言ではない多大な功績を誇っています。

ネットで最近の様子を見るとまだラオスは素朴で穏やかな国のままのようでホッとしますが、先日の現地事務所の方の報告では、ヴィエンチャンの中学生達もスマホを持ち歩いているとか。ラオスは今どんな国なのでしょう?今度は女友達の一人として、チャンタソンさんやスタッフの皆様と一緒に現代のラオスを巡ってみたいです。



吸水のために集まる蝶たち



プーカオクワイ国立公園